

司馬遼太郎全集
22

妖花
の怪館



司馬遼太郎全集 第二十二卷

第二十五回配本 妖怪・花の館他

定価 一八〇〇円

昭和四十八年九月三十日第一刷
昭和五十六年十二月一日第四刷

著者 司馬遼太郎

発行者 杉村友一

発行所 株式会社文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三―三
電話(代表)〇三二六五―二二一

印刷所 大日本印刷

製本所 大日製本

製函所 トーシキ

万一落丁乱丁の場合はおとりかえ致します

灰の怪館

馬遼太郎全集
22

文藝春秋

司馬遼太郎全集第二十二卷

妖怪

5

花の館

333

短編

外法仙

421

朱盜

牛黄加持

443

八咫鳥

485

司馬遼太郎の世界 尾崎秀樹

505

A 題 装
D 字 幀
栗 中 三
屋 田 井
充 功 水
一

妖

怪

目次

京へ	9
花ノ御所	28
兵法	63
唐天子	99
さわらび	129
遠近	164
藪のあたり	218
富子	241
沖ノ島	273
三条河原	303

京

へ

この時代にはこんなやつがいた、というはなしである。
この時代とは、

際限のない戦乱と一揆

慢性化した飢饉

都における無警察、無秩序、頽廃

土民の擡頭

室町將軍家のひとり栄華

といったふうの時代で、室町の頽廃期といっていい。有名な応仁ノ乱よりややさかのぼって十数年前といったところ、この「源四郎」の青春期だった。

「ばかっている」

と、ある日、源四郎はにわかには熊野の山中でおもった。
このときから、行動がはじまった。

「都へ出て、將軍になろう」

むろん、正気である。

京

この若者のうまれた熊野は紀州半島の南を占める大山塊

で、高峰が連立し、溪は深く、溪流は早く、山あいに湯が湧き、霧はつねに青く、古来、行者の行場とされている。

母は、遊女であつた。

もとは熊野本宮の巫女であつたらしいが、多くの巫女がやがてはそうなるように、山の遊び女になった。

熊野は、これほどの山中でありながら、都の者がこれほど詣でる場所もない。王朝のむかしから、

——蟻の熊野詣。

といわれ、天子をはじめ京の貴族が何百人の供をつれてこの熊野に詣でるのがすたりのない流行とされてきている。参詣者が山坂を蟻のようにつらなつてゆくところから蟻の熊野詣といわれたのであろう。

そのための遊び女も多かった。遊び女たちはよく子を宿した。このため熊野では貴族の落し胤が多く、たとえは源平のころに活躍する頼朝・義経の叔父新宮十郎行家は、源為義が熊野で遊び女にうませた子である。

山には、そのたぐいの者が多い。

牛鬼峠には「大納言の子」というきこりもおれば、那智山には「少将のむすめ」という遊女もいる。

そのなかで源四郎は、

「室町將軍六代足利義教公の落胤」

ということになっていた。それを若いころから騒がしく唱えているのは母親の萱だったが、むろんなんの証拠もない。ある年の夏、都から武家貴族がおおぜいきた。そのう

ちのもっとも尊貴な人物の夜伽を萱がしたというのだが、それだけのことである。たしかにその人物こそ足利一族だったというのだが、それがのちの義教將軍であるかどうかは疑問であった。

「たしかにそうじゃ」

と、萱は源四郎の幼児のころからそのように教えてそだてた。

それだけが、母親の遺産である。

その母親が死に、源四郎は弟切峠の上にある墓場まで背負って行った。穴を掘り、そのなかへ母親のからだを落しこんだ瞬間、源四郎はひと声、鳥がとびたつほどの大声で泣いたが、しかし土をかぶせたときにはもう目がすわっていた。

「都へ出て、將軍になろう」

とつぶやいたのは、このときである。

その日は、小屋にもどって寝たが、体中の血が酢になったようで、ねむれたものではなかった。

二十二年、母親の萱とこの小屋でくらししたが、その母親はいまはいない。

「なんということだ」

源四郎は寝わたりのなかから臉をつりあげて小屋のなかを見まわした。壁にかかったミノや古びた萱笠、いろり、その上の鍋、なにもかもが、母親の死とともに呼吸をとめて

しまったように白ばっくれている。

「うぬらも、浄土へ行つたか」

と、源四郎はつぶやかざるをえない。母親の生活とともにあったそれらは、母親がこの世を去るとともにそれらの魂も供をして冥土へ去ったようにしか思えない。おそらくそうであろう。とすれば、このままこの小屋にいるかぎり、源四郎の魂もふらふらと冥土へよろめき出てしまいそうだった。

（これはたまらぬ）

と、源四郎ははね起きた。京へ出發するとすれば夜中ながらいまから発とう。この小屋を焼きはらってしまえ。そうおもった。

源四郎は、奥へ駆けこみ、行李をひとつかづぎ出してきた。

開けた。

そこに、麻地の古びた侍装束がひとそろい、おさめられている。烏帽子もあり、太刀までおさめられている。

（これを着て。――）

左様、これを着て都にのぼろう。死んだ母親がかねがね、

「あの侍装束は、この小屋の宝ぞえ」

といっていたが、なるほど、遊女とその私生児からみれば宝には相違ない。しかしなぜあの萱がこれを持っていたのであろう。

（これはきつと）

と、少年のころ、源四郎はおもった。都の將軍さまの置き形見にちがいない。そのように信じ、そうであればこそ自分は將軍の落し胤だとおもっていたが、しかし長ずるにつれてどうやらちがうと思いはじめた。

（これは下級の青侍あおざむらいの装束らしい）

そう思いはじめた。山ぐらしながら、源四郎は、谷むこの青岩寺で学問もならったし、那智の山伏やまぶしから刀術も学び、諸方の山伏から世間ばなしをきいて、山ぐらしの若者とは思えぬほどに世間智もある。服装による侍の階級も、なんとなくわかつていた。

（太刀ひとつでもそうだ）

銅あがねごしらえの武骨なものである。こんなものを將軍がもっているはずがない。

ともあれ、それをつけた。

戸外に出ると、そのあたりの枯れ草を軒下に積みあげ、タイマツの火を移した。みるみる炎が成長し、やがて轟々と音をたてて小屋をつつんだとき、源四郎は、

「わっ」

と、火にむかって哭いた。哭きつつ坂を駆け降り、ついにふりむかなかった。途中、何度かエリガミをつかんでひきもどそうとする者があったが、そのつどこの中世の若者は般若心経はんにゃしんきょうを大声で誦することによってふりはらいふり切り、最後には剣をぬいて背後なる者を斬った。

それでも追ってくる。

まだ夜があげない。

街道は道というようなものでなく、細い溪流かみづの河原かはらづたいの道である。

ひらっ

と飛ぶ。岩から岩へ。

天に樹木がかさなり、視野はまっくらだが、山に馴れたこの若者にはさほどの不自由がない。瀬の音をきき、耳であるく。音交りのするところが岩場である。

足の裏が、岩から岩へ飛んでゆく。

ややひろい砂地にわらじがついたとき、瞬間、空氣がかわった。

というしかない。

例を、水中の魚にたとえるべきであろう。魚は、水圧の変化で外敵を感じる。人が水中に手を入れてつかもうとすればその手の存在を水の圧で感じ、ひらりと避けてしまう。源四郎の場合も、そうであった。この男の皮膚が、異変を感じさせた。

右へ飛んだ。棒が、その頭上をうなりつつ過ぎた。

「物の怪えっ」

と、悲鳴のように叫ぶ声が背後でおこり、二ノ棒、三ノ棒が飛んできた。

「ちがう、おれは人だ」

と、源四郎があわただしく叫ばねばならぬほど、その棒

はするどかった。

幸い、天が銀色にかわった。夜が明けそめ、杉のこずえの新葉がきらきらとかがやきはじめるころ、互いに相手がわかった。

岩場の上に、大男の山伏が立っている。源四郎は下から仰いだ。

「どうぞ」

と、この若者は微笑をふくみ、下の座敷にでも招じ入れるようないんぎんさで、自分を殺そうとした怪人にいった。下へおりてこい、というのである。

「ご遠慮には、およびませんよ」

言葉づかいが丁寧である。なぜならば母親の萱が、この若者が生後立って歩けるようになったころから室町風の行儀作法と言葉づかいをさんざんに教えこんだ。このため、野性と典雅さのいりまじったふしぎな若者ができてしまっている。

「なにを怖れていらつしやる。私にはあなたを殺め奉るような、そういう心はございませんね」

「妙なやつだ」

山伏も安堵したのだろう、腹を掻きながらなおも用心ぶかく見た。

「お前の名は、なんだ」

「弱いほうから、名乗るべきでしょう」

「弱い？」

山伏は、むっとしたらしい。しかしながら思いなおしてみずから名乗った。

「腹大夫だ」

若者は、笑いだした。なるほど、腹が布袋のように大きい。

「山伏のような名ではありませぬな」

「山伏ではないからさ」

男は、飛びおりた。

存外若い男である。二十六、七か。

「旅をするのに、この装束が便利だからよ。おぬし、どこへゆく」

「京へ」

「ああ、おれもだ。京で一旗あげにゆく」

「なんの旗を」

「インジの大將さ」

印地というのは、やくざ者というほどの意味である。京のみだれにつけてこんで印地の大將になろうとしているらしい。

（印地の大將に？）

この腹大夫は、あふれ者の大將になるために京に出てゆくというのである。世の中にそういう馬鹿がいるのだろうか。

「なぜ印地の大將などになろうとおもったのです」

と、河原の道をくだりながらきいた。腹大夫は大声で笑った。

「おまえ、都の様子を知らぬな」

「とは？」

「いまは都はあぶれ者の天下さ」

腹大夫のいうところでは、いまの都は四つの勢力がうごかしているという。

「四つとは？」

「まず土倉さ」

土倉とは質屋のことである。江戸時代の質屋とくらべれば比較にならぬほど巨大な存在で、大名から庶民にいたるまでの幅広い金融活動をかれらはしている。

が、これより強い存在は一揆の大将であろう。腹大夫にいわせると一揆の大将が第二番目の存在である。都のなかや郊外で間断なく一揆がおこり、かれらは徳政(借金棒引き令)を幕府に強要したり、土倉を襲撃してその質草を強奪したりしているが、その庶民の武装蜂起の専門的な指導者が一揆の大将といわれる連中だった。

「最後は將軍と管領(さかん)と首相というべきかだよ」

「三番目はなんです」

「それさ、それが印地の大將よ」

印地の大將は平素は子分をあつめてばくちを打ったりしているが、いったん戦乱があったりするとどちらかの側に金で買われ、足輕を提供するのだという。

「足輕とはなんです」

「ほう、足輕を知らぬのか」

いまの流行語のようなものだ。こんにちでは戦争の実体がかわり、鎌倉風の騎馬戦、一騎討といった、つまり武士同士の格闘というふうの戦争の仕方から集団戦になりつつあり、そのためには長柄(ながえ)一本をかついだ徒歩の雜兵(ぞうへい)が大いに役に立つ。その雜兵が足輕である。

諸大名たちは京で権力あらそいをしたあげくついには戦争手段にうつたえるが、そのとき大量の足輕が要る。

「そのとき印地の大將にたのみにくる」

と、腹大夫はいう。なぜならば諸大名は後年の戦国期のように足輕を常備軍としてかかえておく習慣も経済能力もない。このため臨時やといの兵が必要なのである。

「だからどれだけ多くの印地をあつめたかということで大名どもの勝敗がきまる。このため印地の大將というのは大したものよ」

「なるほど」

「おれのような氏(うぢ)も素姓(すじやう)もない、欲だけがありあまつているような男が世の中に出ようとすれば印地の大將になるほかないさ」

「腹大夫さんは、どちらのおうまれです」

「大地のうまれよ」

それしか説明のしようのない、あやしげな素姓であるらしい。

(滑稽なやつだな)

と、源四郎はおもいつつ、腹大夫の様子をみた。顔の肉がたっぷりとき、全体が米だわらのようであり、米だらけに手足がはえて歩いているようである。これほど不恰好なからだをしながら、あれほど身軽に棒がつかえるとは思えないほどである。

「おれの話はすんだ。あんたの番だ」

と、汗くさい肩をつけてきた。

「なんのために京へのぼるのだ」

「私ですか」

源四郎は、掌に繻しゅうをのせている。それをつまんで食いつつ歩く。

「都へのぼって將軍になるのです」

「……………」

と、腹大夫は沈黙した。沈黙し、源四郎の横顔をみた。

この男、気が触れているのではあるまいか。

「將軍とは、征夷大將軍のことだろうな」

「ええ。淳和奨学院ノ別当、源氏ノ長者、内大臣、征夷大將軍」

と、足利將軍の正式の肩書を源四郎はいった。

「気でもちがっているのかね」

腹大夫は、他家に忍びこんだ盜賊が飼犬にそつと手を出して撫でるような、そういう慎重さでいった。もし狂人

ならばなにをするかもしれない。

「正気です」

「そりゃ、正気だろうけど」

やがて腹大夫は源四郎からかれのいう落し胤おとしいんばなしをきき、叫び声をあげた。

「そりゃ、本当か」

「あたりまえです」

「しかし証拠があるのかね」

「私が証拠ですよ」

「もつともだ」

と、腹大夫はうなずいた。

「ちかごろは、なにぶん世の中がかわった」

將軍や守護大名の相続問題がある。源平のころや鎌倉幕府、室町幕府初頭までは正室の子の長男が相続についての優先権をもっており、家長が指名することで世子が成立する。

が、ちかごろはちがう。なにしろ下剋上の時代であり、世子をきめるのは重臣たちなのである。かれらが評定をひらいたり、またはその強大な者が独断でえらび、

「推戴」

というかたちをとる。重臣たちにとってはそのほうが、実権をふるうために都合がいいからであろう。そのため、嫡子ちやくしか庶子しやくしかなどということもあり問題にならない。諸事、基準も正義もなく、あるのは利害と都合だけのゆるみ

きつた時代なのであり、腹大夫はそれをいうのである。

「だから、都合がいい。都にのぼれば勢いのいい大名に取りつければよからう」

「うん」

源四郎は素直にうなずいた。

「そのうえ都合のいいことに、御当代の義政さまには御台所さまとのあいだにもお側女にも御子はない。姫君はあるらしいが」

その御台所というのは公卿の日野家からきた富子御料人、で、なにかにつけて都で評判の女性だという。

その夕、二人は熊野街道に沿った湯峯^{ゆふね}というところに泊まった。

湯治場である。温泉が川筋の崖下にわき出て、皮膚病の湯治客が多く、宿泊の設備もあり、湯も宿も、熊野本宮が所有し、その下寺の東光寺に経営させている。

宿といっても粗末なもので、一棟に五十人ばかり収容し、むろん板敷のゆかで、寝わらは自分で用意しなければならぬ。

源四郎は、ここで発熱した。

「なあに、湯あたりだろう」

と腹大夫は最初たかをくくっていたが、腹痛をとまないと始めたので不安になってきたらしい。

「わるいものでも食ったのか」

「いや、水にあたったのかもしれない」

と源四郎は高熱の下からいった。源四郎には確信があった。うまれた山の泉だけ飲んで育っただけに、他の場所の水にからだが適わない。

腹大夫は意外に親切な男で、源四郎のひたいを冷やしたり腹を温めたりして熱心に看病してくれた。

もともと、その看病のあいまには湯治客を相手に源四郎の秘密をしゃべりちらしていたらしい。

「あれが、室町將軍家のおとしだねだよ」

とか、

「よくおがんでおけ。末は將軍になる男だ」

とかいった。みな舌をふるっておどろいたが、効果もあった。それぞれが手持の薬を出して源四郎にのませてくれたからである。

翌日になると腹大夫はいよいよ親切になり、
「なあに、どんな薬もきくものか。うまれ在所の水をのめばなおるのだ」

といつて姿を掻きくらました。

夜になって全身汗みどろのまま駆けもどってきた。手に竹の筒いっぱいの水をもっている。

「これだ、この水だ」

と、腕にうつし、源四郎にのませようとした。

「本当に私の在所の水ですか」

源四郎が疑わしそうにいうと、腹大夫は顔を真っ赤にし